18 論説文 (4)

確認問題

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1 私は大分前に日本語教という名の新興宗教を興しました。勿論教祖はこの私ですが、いまのところ残念ながら信者はほとんどいません。でもこの宗教の説くところは至って簡単なもので、この世に折角生を享けながら、日本語という素晴らしい言語を知らずに空しく死んでゆく人を、一人でも少なくする努力をしようということだけです。

2 しかし私のこのような考えは残念ながら私の独創とは言えないのです。前世紀の前半アメリカで活躍したパール・バックという女性作家がいました。この人は『大地』という当時の中国に題材をとった小説で有名になり、後にノーベル文学賞まで貰った有名な小説家でしたが、彼女は自分の父親のことを次のように書いています。キリスト教の宣教師だった彼女の父親は、当時すでに四億人にも達していた中国人が、神の教えを知ることなく暗闇から暗闇へと、まるで人間がナイアガラの滝水のように流れ去って行くのを見るに忍びず、命の危険を覚悟で宣教の為に中国に渡ったと言うのです。①私の気持ちはこのパール・バックの父親が抱いた気持ちと全く同じ純粋な宗教的信念から出たものなのです。

3 現在世界の人口は約六十七億ですが、そのなかで日本語の分かる人は日本人の一億二千七百万の外は、僅か数百万人の様々な程度を異にする日本語学習者がいるだけというのが現状です。このことは考えてみると大変に勿体無いことであるだけでなく、世界の平和にとって危険なことですらあるのです。

4 何故かと言えば日本が最早かつての弱小後進国ではないどころか、まかり間違えば再び世界を混乱に陥れかねないほどの強力な力を持つ超大国の一員と現在なっているからです。ところがこの日本に固有の日本語が、これまで約五百年もの長きにわたって世界の支配言語であったヨーロッパ系の諸言語とは系統の全く違う言語であるために、いま日本と諸外国との意思疎通が巧くいっていないのです。前に述べたように日本の国際的な悪口は、「口の痺れた巨人」とか「声を出さない巨象」、そして意見は言わないけれど金だけは直ぐ出す「自動金銭支払機」などであって、そのどれもが超大国日本の世界に向かっての言語コミュニケーションの不足を突いたものと言えるのです。

5 もし日本語が英語やフランス語のようにとまでは行かなくとも、世界の知識人層の中ではごく普通に学ばれる言語であって、日本語の新聞雑誌や各種の書籍が諸外国でどんどん読まれていれば、②日本と諸外国との間に何かと言うと生まれる誤解や摩擦が遥かに少なくなることは確実です。

6 これまで世界の多くの人にとって日本という国は、いわば暗号で書かれた分厚い本のようなものでした。何か面白そうなことが一杯書いてあるようだが日本語という暗号のわからない外国人には解読できないのです。そこでいま日本人は自分たちの手で日本という魅力に溢れた国を、日本語の分かる人を増やすことによって、世界に開く必要があるというのが私の考えなのです。日本の国際的な言語鎖国の状態を、日本の力で変えようと言うのです。

7 しかしこのことはよく考えてみると本当は筋の通らないおかしなことと言えます。と言うのも私たち日本人は千年以上もの間、進んで古代中国の言葉である漢文を、大変な努力をして学んできました。鎖国の徳川時代でも一部の学者や役人はオランダ語を苦労して習得しています。明治開国以後はそれこそ国を挙げて、当時の英語を中心とする先進国の言語を、大学を始めとする高等教育機関で必死に学んだのです。そしていまは国民全部が英語を話せなくては困るなどと言って、小学校から英語教育を始めようとさえしています。

8 このように日本人はその時そのときに日本が学ぶべきものを持っている国の言葉を自発的に進んで学び、それを通して広く国外から良いものを積極的に国内に取り入れることを絶えずやってきました。外国に優れたもの、進んだ考えがあると思えばためらわずにそれを国内に取り入れるというこの柔軟でこだわりのない進取の気性が、今の繁栄する日本を作ったのだと言えます。

9 ですから世の中が変わり日本が発展して、諸外国が学ぶに値する色々なものを日本が持つようになったのですから、今度は外国のほうが日本を積極的に学ぶ努力を、それも自発的にすべき番が回ってきたに過ぎないと言えます。それなのに外国の人々が自分たちの怠慢を棚に上げて、日本語は難しい、漢字は時代遅れの文字だなどと言ったり、日本が情報開示を怠っている、日本人の言動は透明性を欠くなどと文句をつけたりするのは本当はおかしいのです。今は外国こそが日本に追いつく努力を自前のお金を使って始めるべきなのです。

〈鈴木孝夫「日本語教のすすめ」より〉

□(1) 内容把握 ――線①「私の気持ちはこのパール・バックの父親が抱いた気持ちと全く同じ純粋な宗教的信念から出たものなのです」とありますが、ここでの筆者の気持ちの中にある、パール・バックの父親が抱いた気持ちに通じる「純粋な宗教的信念」を表している一文を探し、その最初の五字を書き抜いて答えなさい。

□(2) 内容把握 ――線②「日本と諸外国との間に何かと言うと生まれる誤解や摩擦」がなぜ起こるかということを、次の文のようにまとめたとき、□に入る最も適切なことばを、Aは十一字で、Bは四字でそれぞれ本文中から書き抜いて答えなさい。

〈日本から世界に向けての□A□の不足によって、互いの□B□が図られていないから。〉

A

B

□(3) 段落構成 本文全体を内容のうえから大きく三つのまとまりに分ける場合、どのように分けられますか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。(1～9は段落の番号を示します)

ア 1 2／3 4 5／6 7 8 9
イ 1 2／3 4 5 6 7／8 9
ウ 1 2 3／4 5 6／7 8 9
エ 1 2 3 4／5 6 7 8／9

□(4) 主題 本文中で筆者が述べようとしていることとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 日本が世界平和に貢献するには、日本語教にさらに独創性を加えて信者を増やし、世界へ積極的に口を出すことが必要である。
イ 日本語が、英語のように世界で学ばれる言語になるには、外国でも小学校から日本語教育を始めるように働きかけるべきである。
ウ 日本の今日の繁栄は、自らが学ぶべき言葉やものを積極的に取り入れる進取の気性のためであり、今後もこれが大切である。
エ 諸外国は、超大国の一員になった日本から学ぶべきものがあるはずだが、現状では積極的に学ぶ努力は行われていない。

学習日　月　日

練成問題

1　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

いま、郊外は生命のかがやきに満ちた青葉の洪水である。若い人達よ、野に出ようではないか。そうして汗ばむまで歩いてみよう。橋を渡って、ゆるやかな傾斜の道をのぼれば草原がひろがっている。初夏の陽を受けていよいよ青い ⓐ この草原はそのまま巨大な一枚のじゅうたんだ。みれば点々と山つつじも花模様を織りなしているではないか。そら、ほうっと君の若い心は歓喜のためいきをはく。

さあ、遠慮なく ＊天与のしとねに腰をおろそうではないか。え？　ここは根に残った去年の枯葉が昨日の雨にぬれそぼっているって？　そう、それではあの丘の頂上のあたりの草がやわらか ⓑ そうだ、行ってみたまえ。どう？　今度は思いきり寝そべられるだろう？　へんにもじもじしているね。草の中に萱の切株があるって？　そうか、それはいけないな。それじゃ、あの松の木の付近の草原はどう？　やっぱり同じようなものじゃないですかって？　そう、そこに気がついてくれたらいいんだよ。現実というものはそういうものなんだ。

おや、どこかで聞いたような言葉だって？　そうだ。これは僕が若い人達をとらえて何べんでも言うきまり文句さ。だが、まあ、がまんしてききたまえ。(ア) すわろうとする草原はいつもきたなく、遠くながめやる草原はいつも美しい。(イ) これはそのまま現実と永遠との関係ではないか。(ウ) 足もとの草原はきたなくてすわりにくいが、この足もとの草原が重なり合って出来ているのが美しい草原全体なのだ。(エ) それなら、われわれは ① 現実の草原を、なんとかしてすわりよくする以外に道がないではないか。

君は永遠という言葉の内容をさぐってみたことがあるかね。② 「永遠なるもの」というレッテルはなにかしら荘厳な思いをわれわれに与える。だが危険なのはこれをはりさえすれば、どんなものでも「荘厳」らしく見えて来るこのレッテルの魔術性なんだ。われわれは言葉の誘惑に弱い。言葉によってすりかえられた内容を後生大事に守って、空中楼閣に登ろうとするところに、人間の、とりわけ若い人達の悲劇があるともいえるだろう。

われわれに一番たしかなのは、すわりにくいごつごつの草原の現実に立っているということ、これだ。これはおよそ「永遠なるもの」とは似ても似つかない「永遠ならざるもの」だ。だが考えてみると、この現実をどうにかすることなしにはわれわれ自身の人生は一歩も前進しない。すわりにくくってもここをすわりよくするように努力しようではないか。今日の、いまの、あまりぱっとしない現実という「永遠ならざるもの」を、骨折って切り拓くことだ。

永遠というものは空虚な観念である。だが、それはわれわれの現実の堆積であるという点では実体を備えたものといえる。けれども、いくら平面的な現実を重ねても永遠という構築物は生まれない。われわれは ③ 立体的な現実を積み重ねなければならない。現実を立体的にする道は、われわれの生を賭けて今日の現実を切り拓くということだ。「永遠なるもの」は、実は、「永遠ならざるもの」からしか生まれない。④ 地平線の向こうあたりにあると思っていた「永遠」は実はわれわれの生の内側にあるのだ。

⑤ なあんだ、君はもうすわっているじゃないか――。

〈保坂弘司「若き知性に」より〉

（注）天与のしとね＝天から与えられたふとん。

□(1)　――線ⓐ「この草原はそのまま巨大な一枚のじゅうたんだ」と同じ比喩の用い方をしている文を、次から選んで記号で答えなさい。

ア　彼女の目は夕闇に浮かぶ妖しく美しい夜光虫であった。
イ　私はこの老人の顔に晴れた秋空のような清澄さを見た。
ウ　きびしい寒気がひと晩中わたしの体をさいなんだ。
エ　雪の色はそこまで行かぬうちに闇にのまれていた。

□(2)　――線ⓑ「そうだ」と同じ意味・用法のものを、次から選んで記号で答えなさい。

ア　相手チームはとても強いそうだ。
イ　木村さんはあす会社を休むそうだ。
ウ　あの人はぼくに似ているそうだ。
エ　今夜は美しい月夜になりそうだ。

□(3)　文中からは次の一文が抜けています。(ア)～(エ) のどこへ入れるとよいですか。記号で答えなさい。

《それと同じで、現実をおいてどこにも永遠はない。》

□(4)　――線①「現実の草原を、なんとかしてすわりよくする」とはどういうことですか。次から選んで記号で答えなさい。

ア　現実の社会を離れて将来へのかぎりない夢を抱くこと。
イ　現実の社会の矛盾を見抜いてその悪を避けて通ること。
ウ　現実の生活を楽しむため自分の好みを生かすこと。
エ　現実の生活における障害を克服する努力をすること。

□(5)　――線②「『永遠なるもの』」を、これより前の部分で何かにたとえています。その表現を八字以上、十字以内で書き抜きなさい。

□(6)　――線③「立体的な現実」とはどういう現実ですか。二十字以内（句読点も字数に数えます）で書きなさい。

□(7)　――線④「地平線の向こう～生の内側にあるのだ」とはどういうことですか。「**永遠は**」という書き出しで、比喩を用いずに書きなさい。

□(8)　――線⑤「なあんだ、君はもうすわっているじゃないか」には、筆者の若い人達に対するどのような心情がこめられていますか。次から選んで記号で答えなさい。

ア　信頼　　イ　軽蔑　　ウ　失望　　エ　疑問

□(9)　本文の内容と合わないものを、次から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　遠くながめやる草原は美しく見えるものだが、それは足もとのきたない草原の積み重なったものである。
イ　遠くから見ると美しい草原が実はきたない現実の連続でしかないように、真の永遠などはありえない。
ウ　若い人達は「永遠なるもの」という言葉の荘厳な感じにまどわされて、現実から離れてしまいがちだ。
エ　現実のきびしさから逃げていては、われわれ自身の人生をすこしでもよくするという道は拓かれない。

2　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

孔子の弟子である子貢が、旅の途中で、汗にまみれながら畑を耕している老人に出会った。①老人は井戸から瓶に水を汲み、えっちらおっちら畑に運んでいる。労力ばかりかかって、［　①　］能率があがらない。子貢は②見かねて、

「水汲みなら、＊はねつるべという便利な機械がある。それを使えばわずかな労力で簡単に水を汲み出すことができますよ。」と教えてやった。すると老人は、

「③それくらい知っているさ。だが、機械を持っていると、機械を使う仕事（機事）が増える。そうなると機械に頼る気持ち（機心）が生まれて、ますますそれに頼ろうとするだろう。機械に頼るばかりになってしまったら、［　②　］、どこに人間の精神が残るというのかね。わしは道具を知らずに使わないわけではない。そんなものを使うことで、精神が汚れるのがいやなのさ。」と答えた……。＊『荘子』に書かれた話である。

人間は、たいへん非力な生き物だ。だからこそ、その力を補うために道具を生み出してきた。それによって文明が興り、文化が創造されたのである。人類の歴史は、つねに機械の発明・発達史とともにあった。いや、道具や機械の発達こそが、人類史が織りなしてきたというべきであろう。

では、なぜ、人間は道具を発明してきたのか。なにより、自然から身を守るため、生活の糧を得るためだ。つぎに、自分の肉体を使う日々の労働から解放されて楽をしたい、という欲求のゆえだった。［　③　］楽をしたいのか。もっと心豊かに暮らしたい、と考えたからである。それには生きていくための労働を最小限にとどめ、それによって得た時間を、人生の愉しみに当てるようにしなければならない。そこで、人間は必死になって、［　④　］便利な道具や機械を発明してきたのだ。

【ところが、どうだろう。その結果、④皮肉なことに、荘子が説いた「機心」がふくらんで、人間は機械にたよるばかりになり、そのあげく、生活はいっそう忙しくなっていった。そして、人間の精神は、いよいよ貧しくなってしまったのである。

便利になれば時間が余るはずなのに、その余った時間に「機事」が入り込む。産業革命の動力源となった蒸気機関が発明されると、それを利用して、数々の機械が生み出された。

「さあ、機関車を作れ！　レールもいるぞ。工場にはもっと人手が必要だ！」

こうして機械の発明は、さらなる労働を要求することになった。

いや、二百年も前の例をあげるまでもない。夜遅く、都心の高層ビルを見上げてみるといい。深夜近くまで明かりが消えることがない。みな、働いているのだ。コンピューターが面倒な計算を瞬時にやってくれるなら、人間はもっと楽になって、一週間に一日だけ働けばいいくらいの余裕を持ち得るはずではないか。

だが、そうはならない。「機事」が「機心」を増大させ、「機心」が仕事をいよいよ増やしていく、という果てしないイタチゴッコが始まったのだ。そのあげく、心豊かに生きる時間は、どんどん奪われてしまった。愉しみのための時間、思索の時間、あるいは＊無為に過ごすゆとりの時間が。そして、しまいには心の平安までが奪われてしまうのだ。この成り行きは、まさに文明の＊逆説でなくてなんだろう。】

しかし、だからといって、ぼくは原始生活に戻れ、などというつもりはない。ただ、これからの世界では、「なんのために？」という目的意識を持たないかぎり、人間らしく生きることがいよいよ困難になっていく、ということを警告したいのだ。

でなければ、我々は、荘子が教えたように、ただ「機事」に追いまくられながら生涯をかけぬけ、「機心」のままに死んでゆくことになって

しまうであろうから。

〈森本哲郎「この言葉！」より〉

（注）はねつるべ＝てこの原理を応用した、井戸の水を汲み上げるための機械。
『荘子』＝古代中国の思想家である荘子（荘周）の著書。
無為＝何もしないこと。
逆説＝一般に真理と認められているものに反する説。

□(1)　［　①　］～［　④　］に入る適切なことばを次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　いったい　　イ　どうして
ウ　より　　エ　いっこうに

□(2)　――線②「見かね（る）」の、ここでの意味として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　見ていてもおもしろくない。
イ　じっくり見ることができない。
ウ　平気で見ていることができない。
エ　見ていて腹が立ってくる。

□(3)　――線①「老人は井戸から瓶に水を汲み、えっちらおっちら畑に運んでいる」とありますが、老人が機械の存在を知りながら、なおこのような作業をしているのは、老人にどのような気持ちがあるからですか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア　もはや機械を使いこなすのは無理だという気持ち。
イ　機械を使っても、仕事は楽にならないという気持ち。
ウ　機械を使うほど、体力は落ちていないという気持ち。
エ　機械を使うことで精神が汚れるのは嫌だという気持ち。

□(4)　――線③「それ」が指している内容を、「**はねつるべ**」ということばを必ず用いて、「～**こと**。」という形で、二十五字以内（句読点も字数に数えます）で書いて答えなさい。

□(5)　――線④「皮肉なこと」を「［　　］的なこと」と言い換えた場合の［　　］に入る最も適切なことばを、本文中から二字で書き抜いて答えなさい。

□(6)　【　】の部分で説明されている「機事」と「機心」の関係を、筆者はたとえを用いてどのように表現していますか。その部分を本文中から十一字で書き抜いて答えなさい。

□(7)　本文中で筆者が主張していることと合っているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　心の平安を取り戻すためには、何もなかった昔の生活に戻るべきである。
イ　心の豊かさを取り戻すには、昔の道具や機械を使いこなしていく必要がある。
ウ　人間らしく生きるためには、機械や道具を使う目的をよく考えて生活するべきである。
エ　ゆとりをもって生きるためには、今以上に進んだ機械や道具を発明していくべきである。

19 随筆 (3)

確認問題

1　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。——兼好法師

「徒然草」と言えば、かならず引かれる有名なくだりです。たしかにこの一言、日本人における美意識をじつに鮮やかに要約しています。そうです。これこそ、日本美の骨髄と言ってもいいかもしれません。

【花はなにも、さかりにだけ鑑賞するものではない。月は＊皎々と照り輝いているときだけ、ながめるものではない、というのです。つまり、完全な姿というものだけが美なのではない、むしろ、不完全な形こそ愛で賞すべきものだと。たとえば、雨のふる夜にかくれている月を恋い、＊爛漫の春を家にこもっていて、知らぬ間に春が立ち去ってしまうというのも、かえって趣が深く、しみじみとした味わいがあるのではないか、というわけです。満開の花より、これから咲こうとしている梢を見あげたり、あるいは、すっかり花が散ってしまった庭をつくづくとながめるほうが、ずっとおもしろいのではないか、と。】

なぜなのでしょう。私はこう思います。

完全なものは、それ自体が申し分なく美しい。しかし、それ自体が申し分なく美しいということは、それと向かい合うこちら側の想像力を伸ばす余地が、まったくない、ということです。鑑賞者は、ただ対象と向かい合っているだけにすぎません。つまり、＊主体は＊客体を、ただ受け入れる以外にないのです。けれど、不完全なものと向き合うときは、対象の不完全さを、こちらの［※］によって補い、美しいものへ完成させねばなりません。鑑賞者は、対象を自分でつくりあげるわけです。

夢みる力によって育てるわけです。

その主体的な美への＊志向、それこそが、美を真の美たらしめるのではないでしょうか。美は永遠不変の客体としてそこにあるのではなく、つねに可変的なものとして、主体がそれをつくりあげてゆくものだ、というのが兼好の言わんとするところであり、それが日本人の美の意識だと私も思うのです。

〈森本哲郎「ことばへの旅」より〉

（注）皎々＝明るく照り輝く様子。
爛漫＝花が美しく咲きみだれる様子。
主体＝能動的な存在。　客体＝受動的な存在。
志向＝心がある事物へ傾くこと。

□(1) **要約**　【　】で囲んだ段落の内容を要約した部分を、同じ段落の中から四十字で探し、その最初と最後の三字を書き抜いて答えなさい。

［　　］～［　　］

□(2) **内容把握**　［※］に入る一語を、同じ段落のここより前の部分から探して書き抜きなさい。

［　　］

□(3) **主題**　——線部「日本人の美の意識」の中心にあるものは何だと筆者は言っていますか。文中から九字で書き抜いて答えなさい。

［　　］

2　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

五年間住んでいる町の一角でも迷うくらいだから、そうとう方向感覚が欠如しているのだと思う。このあいだ自分の住む町で迷ったときは、はじめてこの町を歩くという知り合いと一緒で、どうやら迷ったみたいです、と私が言うと知り合いはひどくあわて、うそでしょう、ねえカクタさんうそでしょう、と言っていて、①ああこの人は、方向感覚にすぐれた人なんだろうなあ、と思った。方向感覚のおかしい人は迷い慣れているから、迷った、という言葉にそんなに動揺しない。そうして歩いていればいつか、絶対にいつか知っている場所に出るのだということを知っている。

私がはじめてひとり旅をするというとき、異国へ向かう私に、心配性の友人は、ふりかえるんだよ、と幾度も②念を押した。ホテルを出て、そのまま歩いていかずに、しばらく先で立ち止まりふりかえって、ホテルへ続く道を頭にたたきこむ。駅やバス停についたらそのまま歩いていかずに、立ち止まりふりかえって、そこへ続く道を覚える。迷路状の場所——屋台街とか、市場とか、路地ばかりの場所とか——を歩くときも、角を曲がったり方向をかえたりするたびにきちんと立ち止まり、ふりかえって、そこを絵として覚えてしまう。そうすれば、朝ホテルを出てバスや鉄道に乗り、いろんな場所へいってもきちんと同じ道筋で帰ってこられるのだと、③彼は力説した。私は言われたとおり、どこへいくときもかならず立ち止まりふりかえって、自分の足元から続く道筋を絵として覚え、覚えながら移動をくりかえした。彼のあたたかい助言には本当に感謝したが、しかし、無駄だった。私はかならず迷った。きっとふりかえっている時間が足りないのだろうと、私はずいぶん長いあいだそこに立ち止まって、ホテルへの道、周囲の店や看板、空の大きさ、そんなものを正確に覚えようとした。それでもきまって迷った。今でてきたホテルと自分の立つ位置の、数十メートルの光景と、これからいくそのほかの場所が、立体的に頭のなかで結びつかなければ、一枚の絵を眺めているのとなんのかわりもないのだということに、私も友人も、気づかなかったのである。

〈角田光代「犬印と方向感覚」より〉

□(1) **内容把握**　——線①「ああこの人は、方向感覚にすぐれた人なんだろうなあ、と思った」とありますが、筆者がこのように考えた理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「この人」は、はじめて歩く町でも、道に迷うことなどは絶対にないという自信を持っているから。
イ「この人」は、自分の住む町で道に迷ってしまうことを、信じられないことだと思っているから。
ウ「この人」は、道に迷うことを、必要以上に怖がっているから。
エ「この人」は、歩いていればいつか知っている場所に出るのだということを知っているから。

［　　］

□(2) **語句**　——線②「念を押（す）」とほぼ同じ意味を表すことばとして、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　音をあげる　　イ　たかをくくる
ウ　釘をさす　　エ　口をそろえる

［　　］

□(3) **内容把握**　——線③「彼は力説した」とありますが、「彼」が力説したことの内容が具体的に書かれている部分を本文中から探し、その最初の六字を書き抜いて答えなさい。

［　　］

練成問題

1　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

半年ほど前のことであるが、日曜日に、郊外の新しい住宅地に住んでいる九歳になる孫娘が遊びに来た。こんにちは――そんなことを言いながら、私の書斎にはいってきて、縁側の籐椅子に腰をおろしたので、私も机から離れて、たばこを一本喫う間、幼い者につきあってやることにした。

「A先生とB先生は、とても仲がいいの。ふたりは結婚するかもしれない。」

突然、彼女は言った。

「A先生って、男の先生か。」「ううん、女の先生、とてもいい先生なの。」「じゃ、B先生が男の先生なんだね。」「そう。」「B先生もいい先生？」「とてもいい先生、ふたりともいい先生。」「そのいい先生どうしが結婚するんだね。」「結婚するのか、どうかわからないけど、結婚するんじゃないかと思うの。」「どうして？」「だって、とても仲がいいんだもの。――ねえ、①結婚するわねえ、結婚するでしょう。結婚すると思わない？」

多少、あいづちを打つのを強要しているようなところがあった。それにしても、この間生まれたとばかり思っていたのに、いつのまにか結婚などということばを口にするようになっている②孫娘の顔に、改めて目を当てざるを得ない気持ちであった。

「結婚するか、しないか、そんなことわかんないな。だいたい、そのふたりの先生に会ったことがないんだからね。」「でも、この間、おまわりさんに言ったら、おまわりさんも、結婚するだろうと言ってたわ。」「おまわりさんに？」

変な人の意見をきいたものだなと思った。

「どうして、おまわりさんにきいたんだ？」「だって、ときどき、おまわりさんのところへ行くんだもの。よく知っているの。」「何しに行く？」「自転車のチェーンがはずれると、それをはめてもらいに行くの。みんなが行くわ。」「なるほどね。じゃ、おまわりさんも、なかなか忙しいな。それで、おまわりさんに、A先生とB先生のことをきいたんだね。」「うん。そしたら、おまわりさんも、A先生とB先生がいっしょに電車に乗るところを見ているから、ふたりの先生が仲のいいことを知っているんだって。」「ほう。それでおまわりさんが、結婚するだろうと言ったんだね。」「そうなの。」

それから、

「でも、ふたりが結婚したら、その日にタイホするんだって。」「逮捕？」「つかまえちゃうんだって、――ほんとうかしら？」

私が思わず笑ったので、孫娘も笑った。

③私は孫娘と、こうした会話を取りかわした日、一日じゅう、なんともいえず、心がゆたかな楽しいもので満たされているのを感じていた。

【子どもたちが〝とてもいい先生〟というA先生も、B先生も、ほんとうにいい先生にちがいないと思った。そしてたくさんの幼い者たちの目に見まもられているふたりのお互いの心の寄せ合い方は、幼い者たちが感じとっているように愛情というものであろうと思う。そして、幼い者たちが大きい期待をもって見まもっているように、ふたりの愛情は結婚という形に進展していくかもしれない。】

そしてその結婚まで、駅の近くの派出所では、心の広いところもあれば、優しいところもあるおまわりさんが、ふたりの先生がいっしょに電車に乗るのを、④多少子どもたちと同じ心で、ときどき目に収めている。そして毎日のように子どもたちはチェーンのはずれた自転車や、ハンドルの曲がった自転車をもってやってくる。子どもたちは派出所にやってくるたびに、必ずおまわりさんと同じ会話をかわす。

「ほんとに逮捕するの？」「そりゃ、逮捕するさ。」

すると、そのたびに、子どもたちは、うわっと歓声をあげるにちがいない。

この先生と子どもとおまわりさんの話は、私にはなかなか⑤得がたいものに思われる。どこにも暗さのない、明るく、楽しい挿話である。この挿話の世界を作りあげているのは子どもの心である。

〈井上靖「わが一期一会」より〉

□(1)　――線①「結婚するわねえ～すると思わない？」という言い方には、孫娘のどんな気持ちが表れていますか。次から最もよいものを選んで記号で答えなさい。

ア　きっと結婚すると期待する気持ち。
イ　結婚するかどうかを早く決めてほしい気持ち。
ウ　結婚したらあとで困ることになるという気持ち。
エ　結婚してしまったらつまらないという気持ち。

□(2)　――線②「孫娘の顔に、改めて目を当てざるを得ない気持ち」とはどんな気持ちですか。次から最もよいものを選んで記号で答えなさい。

ア　よくここまで大きくなってくれたと喜ぶ気持ち。
イ　孫娘の想像力の豊かさに感心する気持ち。
ウ　くだらないことに興味を持つものだとあきれる気持ち。
エ　子供の成長の速さに目をみはる気持ち。

□(3)　――線③「私は孫娘と～満たされているのを感じていた」のはなぜですか。その理由が書かれている段落の最初の五字を書きなさい。

□(4)　【　】で囲んだ部分からは、「私」のどんな気持ちが感じられますか。次から最もよいものを選んで記号で答えなさい。

ア　先生たちの結婚の実現を期待する気持ち。
イ　先生の生徒への愛を今後も期待する気持ち。
ウ　子どもの期待通りになればいいという気持ち。
エ　子どもたちの予想の確かさを知りたい気持ち。

□(5)　――線④「多少子どもたちと同じ心で」とは、どういうことですか。次から最もよいものを選んで記号で答えなさい。

ア　温かく見守ろうとする好意をもって。
イ　いつ結婚するだろうという好奇心に満ちて。
ウ　いつ逮捕できるかと期待しながら。
エ　ほほえましくもあるが、多少は妬ましい気持ちで。

□(6)　――線⑤「得がたい」のここでの意味に最も近いものを、次から選んで記号で答えなさい。

ア　珍しい　　イ　愉快な
ウ　貴重な　　エ　奇妙な

□(7)　この文章の会話の中に、実際にかわされたのではない、空想された会話があります。何か所ありますか。数字で答えなさい。ただし、「　」で囲んだものを一か所として数えます。

2　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私の生まれたところは、南アルプスの麓（ふもと）の、たいへん奥まった山里である。私の家の庭つづきが松山であった。そこは、私の遊び場でもあり、幼い日の㋐書斎でもあった。

ある日、学校から借りて来た「ハイジ」という本を、私はこの松山で読んだ。ハイジのあの純真な心。純真ということは、こんなに美しいものかと、感動で胸をふくらませた。あの少年の日の心のどよめきは、目を閉じると、今も、ういういしく感じられるほどだ。アルムの爺（じい）さんの、男らしい渋い愛情も、子ども心にもよく感じられた。胸をときめかせながら、美しいハイジと、あのアルムの爺さんとが、アルプスの岩に並んで腰かけて、峰々に㋑映える夕焼けを眺めている場面まで読みすすんだ。①その場面を思い浮かべて、心の中がほうっとあたたかになり、幸福に似たものが、心の中にひろがって行くような気がした。その時のハイジとアルムの爺さんとの会話がいい。

――お爺ちゃん、夕焼けはなぜあんなに美しいの。

――この世の中で一番美しいものは、お別れする時の言葉さ。夕焼けは、太陽が山に［　※　］をいっている挨拶（あいさつ）の言葉だから美しいのさ。

こんなふうな会話の内容だった。六十年以上もたった今でも、会話の内容だけは心の中に生きている。その時私は、アルムの爺さんの言葉はなんて素晴らしいのだろうかと思った。言葉がこんなに素晴らしいと思ったのは、この時が生まれてはじめてのような気がする。

②私はため息をつきながら、本をひざの上において顔をあげた。彼方（かなた）には、日本アルプスの峰々がそびえていた。夕焼けをうけて、赤く赤く染まって、遠く、空の彼方まで連なっている。国こそちがえ、同じ名前のアルプスの峰々が、物語のハイジのアルプスと同じように、夕焼けているのだ。美しいなあ、と思った。叫びたくなるほどの強い感動をうけた。私は、本をにぎって立ち上がった。

朝に夕に、いつも、目の前に眺めていた山が、こんなに美しかったのか。③毎日のように夕方になると豆腐を買いにやらされたあの町が、こんなに美しかったのかと、子ども心にも驚きながら恍惚（こうこつ）としてあたりが暗くなってしまうまで松山に立ちつくすのであった。

④この夕方のことを、私は、ハイジの夕方と名づけて、昼と夜の㋒キョウカイのこの時刻になると、松山にかけのぼってアルプスの峰々や、谷間の集落が夕焼けつつ暮れていくのを、何か強く心ひかれて眺めているのであった。

⑤こんなことがあってから、私の読書の傾向が、少しずつかわっていった。ただ単に自然を㋓サンビしたような文章は、私には縁のないものであったが、「ハイジ」の感動が私の心をかえたのであった。今から考えると、私が大自然を㋔ソザイとして物語を書くようになったのも、その一番の大もとは、「ハイジ」の感動であったかも知れない。

〈椋鳩十「読書のかたわらにあるもの」より〉

□(1)　――線㋐～㋔そのカタカナは漢字で、漢字は読み方をひらがなで書きなさい。

㋓	㋐
㋔	㋑
	㋒

□(2)　――線③「毎日のように」はどこを修飾していますか。次から最もよいものを選んで記号で答えなさい。

ア　なると
イ　やらされた
ウ　美しかった
エ　驚きながら
オ　恍惚として
カ　暗くなってしまう
キ　立ちつくすのであった

□(3)　――線①「その場面」とありますが、「その」が指している部分を抜き出し、その最初と最後の三字を書きなさい。（句読点は含みません）。

［　　～　　］

□(4)　［　※　］に最もよくあてはまる言葉を考え、ひらがな五字で書きなさい。

□(5)　――線②「私はため息をつきながら」とありますが、「ため息」をついたのはなぜですか。その理由を考えて簡単に書きなさい。

□(6)　――線④「この夕方のことを、私は、ハイジの夕方と名づけて」とありますが、「ハイジの夕方」と名づけたのはなぜですか。次から最もよいものを選んで、記号で答えなさい。

ア　ハイジの物語を読んで受けた感動が、毎日眺めていた山や町の夕方の美しさを発見させてくれたから。
イ　ハイジの物語を読んで、ハイジのあの純真な心が日本アルプスの夕焼けのように美しいと思ったから。
ウ　ハイジの物語に描かれている夕焼けが、日本アルプスの夕焼けと同じように美しいことがわかったから。
エ　ハイジの物語に描かれている夕焼けとは違って、松山や町の夕焼けの新しい美しさを発見したから。

□(7)　――線⑤「こんなことがあってから、私の読書の傾向が、少しずつかわっていった」とありますが、どのようなものを好んで読むようになったと思われますか。次から最もよいものを選んで記号で答えなさい。

ア　自然の美しさと厳しさ、その厳しい自然と闘いながら生きる人々のたくましさを描いたもの。
イ　自然の美しさを、人間を寄せつけない厳しさを持ったものとして描いたもの。
ウ　自然の美しさを、人間を超越したものとして幻想的に描いたもの。
エ　自然の美しさと、自然の中で生きる人々の心の純真さを描いたもの。

17 論説文(3)

確認問題（P94・95）

● (1) 日本人の精神構造と文化

(2) (例) 親が、生活の中で子どもたちに季節感を教えること。

(3) (例) 自分の存在の有限性をとらえ、自分自身の死のイメージを備え持つこと。

(4) エ

解説

(1) 四季の変化から日本人の四季感が生まれ、そこから日本人の精神構造と文化が形成されたと考えられます。

(2) 直後の「親はことあるごとに～必要があります」の内容をまとめましょう。

(3) 直前の「死によって～備え持つということ」の内容をまとめましょう。ポイントは、子供自身が存在の有限さをとらえて死のイメージを持つということです。

(4) アの「文学作品を読まなくなった」ことは本文では話題とされていません。イは、「日本人の精神構造と文化」と「季節の変化をするどく感じとる独特の感覚」が逆の関係になっています。ウは、現代が「国際化が進む」時代であるかどうかは話題にされていません。また「これまでのあり方」を変えることについても述べられていません。エは、「それはもちろん～」で始まる段落の内容に合致します。

練成問題（P96～99）

1 (1) イ (2) ア (3)ⓐ ウ ⓑ ア

(4) 自己自身を客観視（する） (5) 自己（自身）、（または）自分

(6) (例) 日本人には、他人の愚かさを笑う前に、まず自分の愚かさを笑うユーモアがほしい。

解説

(1) あとの「この場合、その客嗇（りんしょく）な～怒るわけにはゆかない」から考えます。

(3) 「エスプリとは、～相手をからかったり、やっつけたりする一種の自己防御」とあり、「ユーモアの本質は、人間の愚かさ、ばからしさを、自分自身を材料にして笑う点」とあります。

(4) 自分を客観的に見るということ。

(6) 最後の一文「他人の愚かさを笑う前に～」をまとめます。これは冒頭の「日本人のように緊張度の強い（＝きまじめな、気持ちに余裕のない）国民は、ともすれば殺気だってくる」と呼応しています。

2 (1) ㋐ ふうぶん ㋑ もと ㋒ かせん ㋓ あかつき ㋔ いちじる

(2) 苦闘 (3) コロンブス～突破航路だ

(4) エ (5) ウ

(6) 自分自身の判断～のだという喜び

解説

(3) 「それは～知識に過ぎなかった」とあるので、その「知識」に相当する部分を探します。

(4) 1～3でマゼランの探検を例にとり、「当時の探検の成否は、それを実行した探検家個人の力に負うところがはるかに大きかった」と述べています。4ではそれをうけて、現代の探検との違いとしてまとめ、5の結論「現代の探検からは、マゼランと同じ感動（自分の意志、判断が正しかったことを知る喜び）が得られなくなった」へと導きます。

(5) アは「皆無」「全くなくなった」が言い過ぎています。イは段落1の内容と合わず、ウは1と合っています。エの「太平洋」は「新大陸の東岸」の誤りです。

(6) 「マゼランと同一の感激」に相当する部分を、段落4から探します。

【ひとくちメモ】

河盛好蔵（一九〇二～二〇〇〇）＝堺市生まれ。フランス文学者。主な著書は「人とつき合う法」「エスプリとユーモア」など。

【ひとくちメモ】

マゼラン（一四八〇頃～一五二一）＝ポルトガルの航海者。スペインのカルロス一世の援助で世界一周を企て南アメリカ大陸の南端（マゼラン海峡）を通過、その西の大洋に太平洋と命名し、グァム島を経て、フィリピンのセブ島で原住民に殺された。最初の世界周航者である。

マルチン・ベハイム（一四五九頃～一五〇七頃）＝ドイツの航海者、地理学者。商人としてヨーロッパ各地を旅行し、現存する最古の地球儀を制作した。

筑波常治（一九三〇～）＝東京生まれ。科学評論家。主な著書は「自然と文明の対決」「日本の農業につくした人々」など。

18 論説文(4)

確認問題（P100・101）

● (1) でもこの宗

(2) A 言語コミュニケーション

B 意思疎通

(3) ア

(4) エ

解説

(1) 段落1に、筆者が「日本語教という名の新興宗教を興（おこ）し」とあり、その宗教の説くところを説明しています。「宗教」ということばは、自分の考えを広めたいということから用いた比喩（ひゆ）であるといえます。

(2) 前の段落4で説明されています。

(3) 段落1・2は、「日本語教」についての説明です。段落3～5では、世界の言語の中での日本語の位置付けとその問題点が述べられ、段落6～9では、その日本語を暗号のようなものとしてとらえている諸外国は、積極的に日本語を学ぶべきであるという主張が説かれています。

(4) 段落9の中に「それなのに外国の人々が自分たちの怠慢（たいまん）を棚に上げて～」とあるように、筆者は、諸外国が日本語を積極的に学ぶ努力をするよう訴えています。

練成問題（P102～105）

1 (1) ア

(2) エ

(3) ㋓

(4) エ

(5) 遠くながめやる草原

(6) (例) われわれの生を賭けて切り拓いた現実。

(7) (例) 永遠は、ぱっとしない今日の現実を切り拓くことによってのみ、われわれのものになる。

(8) ア　(9) イ

解説

(1) アは隠喩（「～のようだ」のような表現を用いず、直接には比喩であることを表していないもの）。イは直喩（「～のようだ」のような表現を用いて、直接比喩であることを表しているもの）。ウ・エは擬人法。

(2) ア～ウはともに伝聞、エは様態を表します。

(5)「永遠ならざるもの（現実）」は「足もとの草原」にたとえられています。

(6) 次の「現実を立体的にする道は～」の一文から考えます。

(7) 後半部「永遠というものは～」で始まる段落の内容をまとめて考えてみましょう。

(8) いろいろと若い人たちに注意を与えたが、若い人たちはもうとっくにその注意を実行していたではないか、心配することはなかった、という意味。

2

(1) ① エ　② ア　③ イ　④ ウ

(2) ウ

(3) エ

(4) (例) はねつるべを使えば、楽に水をくみ出せること。

(5) 逆説

(6) 果てしないイタチゴッコ

(7) ウ

解説

(1) 適切な副詞を補充する問題。①～③は呼応の副詞です。

(3)「わしは道具を知らずに使わないわけではない。そんなものを使うことで、精神が汚れるのがいやなのさ」という老人の言葉に着目して判断します。

(5) 筆者がどのような事態を指して「皮肉なこと」といっているのかを考えます。人間が道具を発明したのは究極的には日々の労働から解放されて心豊かに暮らしたいと考えたからにほかならず、そのために便利な道具や機械を次々に発明したのでした。ところが、そうした機械・道具の発明のおかげで、仕事は増え、生活はますます忙しくなっていったというのです。この点を指して筆者は「皮肉なこと」と述べており、「文明の逆説」ととらえています。

(6) 便利な機械や道具を作ることが生活の忙しさに拍車をかけ、それを改善するために新たに道具や機械を開発し…という繰り返しを、筆者は「果てしないイタチゴッコ」と皮肉って表現しています。

(7) 筆者の主張は、最終段落から二番目の段落で述べられています。現状から原始生活に戻れない以上、人間らしく生きるには「目的意識」をしっかり持つことが必要だと、筆者は強調しています。

19 随筆(3)

確認問題（P106・107）

1

(1) 完全な～ものだ

(2) 想像力

(3) 主体的な美への志向

解説

(1) 接続語に注意します。「つまり」と要約し、「たとえば」と具体例を挙げています。

(2) 前に「こちら側の想像力を伸ばす余地が、まったくない」とあります。

(3)「主体がそれ（美）をつくりあげてゆくものだ」という考えが日本人の美の意識の中心にあると、筆者は述べています。

2

(1) イ

(2) ウ

(3) ホテルを出て

解説

(1) 知り合いが、「うそでしょう、ねえカクタさんうそでしょう」と言っていることから、知り合いは、筆者が自分の住む町で道に迷ったということを、信じがたく思っていることがわかります。迷い慣れている筆者は動揺している知り合いを見て、道に迷うことがない「方向感覚にすぐれた人なんだろう」と思ったのです。

(3)「彼」が助言した、道に迷わないように「ふりかえる」とは、どのようにすることなのかについての具体的な説明が始まるのは、「ホテルを出て～」からです。

練成問題（P108～111）

1

(1) ア　(2) エ　(3) この先生と　(4) ウ　(5) ア

(6) ウ　(7) 2（二）

解説

(2) 前に「この間生まれたとばかり思っていたのに」とあります。

(7)「ほんとうに逮捕するの？」「そりゃ、逮捕するさ。」は、筆者（私）が子供たちと「おまわりさん」の会話を想像したもの。

2

(1) ㋐ しょさい　㋑ は　㋒ 境界　㋓ 賛美　㋔ 素材

(2) イ　(3) 美しい～ている　(4) さようなら

(5) (例) アルムの爺さんの言葉の美しさに感動したから。

(6) ア　(7) エ

解説

(3)「私」自身のことを書いた部分を含めないこと。

(4)「お別れする時の言葉」として最も一般的なものを考えます。

(5) 前の「その時私は～生まれてはじめてのような気がする」から考えます。

(6)「ハイジ」を読んだ日の夕方の強い感動は、その前の二つの段落で述べられています。

(7) 筆者の感動の中心は何であったかを考えます。第二段落に「ハイジのあの純真な心。純真ということは、こんなに美しいものかと、感動で胸をふくらませた。」とあるのがヒント。

【ひとくちメモ】

「ハイジ」＝スイスの作家ヨハンナ・シュピリ（一八二七～一九〇一）の小説。日本では「アルプスの少女ハイジ」として親しまれている。

椋鳩十（一九〇五～一九八七）＝長野県生まれ。作家、児童文学者。本名は久保田彦穂。代表作は「片耳の大鹿」「山のふしぎ」「山の大将」など。